

編集委員

今井 淳司	大野 裕	北西 憲二	北村 婦美	齊藤 万比古
下山 晴彦	藤澤 大介	中尾 智博	中村 伸一	西村 馨
林 直樹	平島 奈津子	福山 和女	妙木 浩之	山中 康裕

編集同人

青木 省三	飯森 眞喜雄	伊藤 良子	植木 啓文	大森 健一	加藤 敏
亀口 憲治	北山 修	衣笠 隆幸	久保 千春	久保木 富房	小谷 英文
小林 和	坂口 信貴	坂野 雄二	鈴木 純一	高橋 徹	高江洲 義英
滝川 一廣	瀧口 俊子	田畑 治	中村 敬	植林 理一郎	西村 良二
原田 誠一	平木 典子	弘中 正美	広瀬 徹也	前田 ケイ	松浪 克文
村山 正治	山内 俊雄	山上 敏子	渡辺 久子		(五十音順)

編集室から

数年前、後輩の医師を突然死で亡くした際、私は葬儀に行かなかった。正確には、行けなかった。「彼の死を受け入れがたい」というのが当時の自覚であったが、今振り返ると、おそらく私は、死という事象そのものを受け入れられなかったのだと思う。診療行為として死の近くをうろついていたにもかかわらず、死が自分たちの側にもあるという現実を、当時、自身が身体不安を抱えていたこともあり、直視できなかったのである。

本号では、悲嘆の最前線で活動されている方々から、さまざまな視点の玉稿をいただいた。どれも大切な視点であり、表現の違いはあれども、そこに流れる思いは共通していると感じた。特に強く感じた共通点は、「悲嘆から目を背けない」「悲

嘆を抱える人から逃げない」という姿勢であった。

「悲嘆を病理化するべからず」という主張のもと、精神医学は長く遷延性悲嘆を診断基準から遠ざけてきた。その陰で、臨床家は実は都合よく死と向き合うことを避けてきたのではないか。その背景の一部には、死に対する自らの恐怖や嫌悪があったのではないか。

遷延性悲嘆症が診断基準に収載されたことは、臨床家が遷延性悲嘆を診るようになるというだけではない。死別を経験した人を受け入れ、悲嘆に向き合い、そして自身の恐怖や嫌悪とも向き合い受け入れることを意味している。本号が、その課題に向き合うための一助となることを願う。

(D.F.)

精神療法 第52巻第3号 (年6回発行)

2026年6月5日発行 (通巻274号)

定価2,420円(10%税込) 年間購読料17,820円(10%税込/増刊含/送料不要)

購読ご希望の方は電話・葉書にてお申し込み下さい。

全国の書店からも注文できます。

発行所 株式会社 金剛出版

発行人 中村 奈々

〒112-0005 東京都文京区水道1-5-16 升本ビル

Tel. 03-3815-6661 Fax. 03-3818-6848

振替口座 00120-6-34848

e-mail eigyo@kongoshuppan.co.jp

URL <https://www.kongoshuppan.co.jp/>

表紙レイアウト 白井新太郎装釘室/印刷・製本 太平印刷社

【JCOPY】〈出版者著作権管理機構 委託出版物〉 本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構(電話 03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mail: info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。